

国際芸術祭「あいち」組織委員会 運営会議

次 第

日時：2021年3月30日（火）

午後1時30分から

場所：国際芸術祭「あいち」

組織委員会事務局内

1 開 会

2 議 事

議案1 国際芸術祭「あいち2022」の企画概要について

議案2 2021年度事業計画及び収支予算について

3 閉会

<配付資料>

資料1：国際芸術祭「あいち2022」の企画概要について

資料2：2021年度事業計画及び収支予算について

議案 1 国際芸術祭「あいち 2022」の企画概要について

国際芸術祭「あいち 2022」
企画概要

開催概要

開催目的

- ・新たな芸術の創造・発信により、世界の文化芸術の発展に貢献します。
- ・現代芸術等の普及・教育により、文化芸術の日常生活への浸透を図ります。
- ・文化芸術活動の活発化により、地域の魅力の向上を図ります。

名称

国際芸術祭「あいち 2022」

テーマ

STILL ALIVE

今、を生き抜くアートのちから

芸術監督

片岡 真実（森美術館館長、国際美術館会議(C I M A M)会長）

会期

2022年7月30日（土）～ 10月10日（月・祝） [73日間]

会場

愛知芸術文化センター ほか

事業展開

現代美術

- ・国内外のアーティストの作品展示などで、最先端の現代美術を紹介します。
- ・愛知県美術館を含む愛知芸術文化センターを中心として、県内での広域展開を図ります。

パフォーマンスアーツ

- ・国内外の先鋭的な演劇、音楽、ダンスなどの舞台芸術作品を、愛知芸術文化センターを中心に上演します。

ラーニング

- ・幅広い層を対象とした様々な「ラーニング・プログラム」を実施します。

連携事業

- ・県内の芸術大学を始め、多様な主体との連携による事業を展開します。
- ・参加アーティストによる短期間の巡回展示を県内数か所で開催します。

オンライン展開

- ・会場での作品展示や上演等のほか、オンラインでの映像配信やプログラムなどを実施します。

主催

国際芸術祭「あいち」組織委員会

企画体制

〈同じ肩書の場合は、姓のアルファベット順。[]内の役職名は2021年3月30日現在。〉

芸術監督

片岡 真実

[森美術館館長/国際美術館会議 (CIMAM) 会長]

Kataoka Mami



photo: Ito Akinori

ニッセイ基礎研究所都市開発部、東京オペラシティアートギャラリー・チーフキュレーターを経て、2003年より森美術館。2020年より同館館長。
2007～2009年はハイワード・ギャラリー（ロンドン）にて、インターナショナル・キュレーターを兼務。第9回光州ビエンナーレ（2012年）共同芸術監督、第21回シドニー・ビエンナーレ芸術監督（2018年）。2014年から国際美術館会議（CIMAM）理事を務め、2020年より会長（～2022年）。

キュレトリアル・アドバイザー

コスミン・コスティナス

[パラサイト エグゼクティブ・ディレクター/キュレーター]

Cosmin Costinaș



photo: Trevor Yeung

2011年よりパラサイト（香港）のエグゼクティブ・ディレクター/キュレーター、2021年のカトマンズ・トリエンナーレ芸術監督も務める。過去には、ダカール・ビエンナーレ（2018年）やダッカ・アート・サミット（2018年）のゲスト・キュレーター、第10回上海ビエンナーレ（2014年）共同キュレーター、第1回ウラル・インダストリアル・ビエンナーレ（エカテリンブルグ、ロシア）共同キュレーター（2010年）、BAK（ユトレヒト、オランダ）キュレーター（2008-2011年）、『ドクメンタ12 Magazines』編集者（2005-2007年）を歴任。パラサイトでは、2015年の施設の大規模な拡張と新居地への移転を監督し、次のようなものを始め、多くの企画をキュレーションしてきた。「Koloa: Women, Art, and Technology」（Langafonua, Nuku'alofa, TongaとArtspace, Aucklandに巡回、2019-2021年）、「A beast, a god, and a line」（Dhaka Art Summitに巡回、Myanm/art & The Secretariat, Yangon、Museum of Modern Art in Warsaw, Kunsthall Trondheim, MAIIAM, Chiang Maini巡回、2018-2021年）、「Is the Living Body the Last Thing Left Alive? The new performance turn, its histories and its institutions」（2014年）、「グレート・クレセント 1960年代のアートとアジェーション——日本、韓国、台湾」（森美術館、MUAC（メキシコシティ）に巡回、2013-2016年）、「A Journal of the Plague Year」（The Cube（台北）、Arko Art Center（ソウル）、Kadist & The Lab（サンフランシスコ）にて巡回、2013-2015年）。

ラーナ・デヴェンポート

[南オーストラリア州立美術館館長]

Rhana Devenport



2018年より南オーストラリア州立美術館（アデレード、オーストラリア）館長を務める。以前は、ニュージーランドのオークランド美術館（マオリ名：トイ・オ・タマキ）館長（2013-2018年）、ゴベット・ブリュースター美術館レン・ライ・センター館長（2006-2013年）を歴任。活動は美術館に留まらず、ビエンナーレやアートフェスティバルにも携わる。アジア・太平洋地域の現代アートを中心に、タイムベースト・メディアを用いた作品や、ソーシャル・プラクティス・アートに造詣が深い。これまでに、リー・ミンウェイ、ナリニ・マラニ、フィオナ・パディントン、リン・ティエンミャオ、ワン・ゴンシン、ジャン・ペイリー、ジュディス・ライトの個展を企画。ヴェネツィア・ビエンナーレのニュージーランド館にて「リサ・レイハナ：エミッサリーズ」（2017年）のキュレーターを務めたほか、シドニー・ビエンナーレ、シドニー・フェスティバル、アジア・パシフィック・トリエンナーレ（クイーンズランド州立美術館）においてシニア職に従事。2018年にニュージーランド・メリット勲章オフィサーを受勲。

マーティン・ゲルマン

Martin Germann



photo: Diana Tamane

[インディペンデント・キュレーター]

ドイツ・ケルン在住、キュレーター。「アナザーエナジー展」（2021年、森美術館、片岡真実との共同キュレーション）の他、「オリバー・ラリック展」（OCAT上海館）、「ラウル・デ・カイザー展」（Mウッズ、北京）、「トーマス・ルフ展」（国立台湾美術館、台中）などの個展を企画。

2012年から2019年まで、ゲント現代美術館（ベルギー）の芸術部門を率い、コレクションやテーマ別の展示のほか、ラウル・デ・カイザー、ジャン・ベイリー、ヒワ・K、ゲルハルト・リヒター、マイケル・E・スミス、ナイリー・バグラミアン、ジェームス・ウェリング、リー・キット、ミハエル・ブーテ、ジョーダン・ウルフソン、レイチェル・ハリソンなどの個展を企画。リリ・デュジュリー個展「Folds in time」（2015年）では、ベルギーの最優秀展覧会に贈られるAICA賞を受賞。過去には、ケストナー・ゲゼルシャフト（ハノーバー）やブエロ・フリードリヒのキュレーターを務め、ベルリン現代美術ビエンナーレにも参画。数多くの展覧会カタログやモノグラフを出版し、『Frieze』、『Mousse』、『032c』などのアート専門誌に寄稿。HISK（ヘント、ベルギー）で定期的に教鞭をとり、ブリュッセルのEtablissement d'en Faceのボードメンバーを務める。

ウンジー・ジュ

Eungie Joo



photo: Heinz Peter Knes

[サンフランシスコ近代美術館キュレーター]

サンフランシスコ近代美術館の現代美術キュレーター。最近では、グループ展「SOFT POWER」（2019-2020年）を企画し、社会の一員、市民としてのアーティストの役割に注目。安養パブリック・アート・プロジェクト/APAP 5（2016年、韓国）芸術監督、シャルジャ・ビエンナーレ12「The past, the present, the possible」（2015年、アラブ首長国連邦）キュレーター、イニョチン・インスティテュート（ブラジル）芸術文化プログラムディレクター（2012-2014年）などを歴任。2007年から2012年までは、ニューミュージアム（ニューヨーク）において、キース・ヘリング・ディレクター兼教育パブリックプログラムのキュレーターを務め、ニューミュージアム・トリエンナーレ「The Ungovernables」（2012年）の企画、「ミュージアム・アズ・ハブ」プログラム主宰、『Rethinking Contemporary Art and Multicultural Education』（2009年）の編集にも携わる。また、第53回ヴェネツィア・ビエンナーレ韓国館「濃縮-ヤン・ヘギュ」展（2009年）コミッショナー、REDCATギャラリー（ロサンゼルス）創設ディレクター及びキュレーター（2003-2007年）を務めた。

ガビ・ンゴボ

Gabi Ngcobo



photo: Sabelo Mlangeni

[ジャベット・アート・センター キュレトリアル・ディレクター]

ヨハネスブルグ（南アフリカ共和国）を拠点とするアーティスト、キュレーター、エドゥケーター。2020年11月より、プレトリア大学ジャベット・アート・センター（Javett-UP）のキュレトリアル・ディレクターを務める。2000年代初頭より、南アフリカ国内外において芸術及び教育のプロジェクトに参画。最近のキュレーションには「All in a Day's Eye: The Politics of Innocence in the Javett Art Collection」（2020年、Javett-UP）、「Mating Birds」（KZNSAギャラリー、ダーバン）などがある。第10回ベルリン・ビエンナーレ「We don't need another hero」（2018年）キュレーター、第32回サンパウロ・ビエンナーレ（2016年）共同キュレーターも歴任。ヨハネスブルグを拠点とする共同プラットフォームであるNGO（Nothing Gets Organised）（2016年-）及び Center for Historical Reenactments（2010-2014年）の創設メンバー。ヴェネツィア・ビエンナーレ南アフリカ館「The Stronger We Become」（2019年）のカタログや、「Public Intimacy: Art and Other Ordinary Acts in South Africa」（2014年、サンフランシスコ近代美術館/YBCA）、「We Are Many: Art, the Political and Multiple Truths」（2019年、ヴェルビエ・アート・サミット）、『Texte Zur Kunst』（2017年9月号）に寄稿。

ヴィクトリア・ノーソーン

[ブエノスアイレス近代美術館館長]

Victoria Noorthoorn



photo: Federico Romero

2013年よりブエノスアイレス近代美術館（アルゼンチン）の館長を務める。近年、ブエノスアイレス近代美術館では彼女のリーダーシップのもと、展示スペースを倍増させ、主にアルゼンチンのアーティストに焦点を当てた74の展覧会を開催し、48の出版物をバイリンガルで発行。また、教育プログラムを拡大し、年7000人の教職員が参加。以前は、MoMAのドローイング・センター、ブエノスアイレス・ラテンアメリカ美術館（MALBA）などを経て、インディペンデント・キュレーターとして第29回ポンテベドラ・ビエンナーレ（2006年）、第41回Salón Nacional de Artistas（カリ、2008年）、第7回メルコスール・ビエンナーレ（ポルト・アレグレ、2009年）、第11回リヨン・ビエンナーレ（2011年）などの国際展を企画。ブエノスアイレス近代美術館では、レオン・フェラーリ、マルタ・ミヌヒン、トマス・サラセノ、セルヒオ・デ・ローフ、アナ・ガラルド、ザネレ・ムホリ、トレイシー・ローズ、ラウラ・リマ、ベルナルド・オルティスなどの展覧会や、またブエノスアイレス近代美術館とフランクフルト現代美術館で展示された「A Tale of Two Worlds」（2017-2018年）などのグループ展を企画。2019年より国際美術館会議（CIMAM）の理事に就任。

トビアス・オストランドー

[インディペンデント・キュレーター]

Tobias Ostrander



メキシコシティ在住、キュレーター。マイアミ・ペレス美術館（PAMM）の前チーフ・キュレーター兼キュレーション担当副ディレクター（2011-2019年）を務めた。カリブ海地域のアーティスト、キュレーター、クリエイターのためのプラットフォーム「Tilting Axis」創設メンバー（2014-2019年）。エル・エコ実験美術館の館長（2009-2011年、メキシコシティ）、タマヨ美術館チーフ・キュレーター（2001-2009年、メキシコシティ）、inSITE2000 アソシエイトキュレーター（1999-2001年、サンディエゴ/ティファナ）、ニューミュージアムが主導する「ミュージアム・アズ・ハブ」の創設メンバー（2007-2012年）を歴任。その他、第24回サンパウロ・ビエンナーレ、エル・ムセオ・デル・バリオ、ブルックリン美術館にも携わる。

ラルフ・ルゴフ

[ヘイワード・ギャラリー館長]

Ralph Rugoff



2006年よりヘイワード・ギャラリー（ロンドン）の館長を務める。ヘイワードでは、「Psycho Buildings」、「The Painting of Modern Life」、「The Infinite Mix」など数多くのグループ展のほか、エド・ルシェ、トレーシー・エミン、ジェレミー・デラー、カデル・アチアなどの個展を企画。リヨン・ビエンナーレ（2015年）のゲスト・キュレーター、第58回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2019年）芸術監督を歴任。渡英前は、カリフォルニア美術大学ワティス（Wattis Institute for Contemporary Art、サンフランシスコ）のディレクターを務め、トーマス・ヒルシュホルン、ロニ・ホーン、アン・ヴェロニカ・ジャンセンズ、マイク・ケリー、マイク・ネルソンなど数多くのアーティストの個展を企画。

デイヴィッド・ハモンズ、ポール・マッカーシー、リュック・タイマンズ、ジャン＝リュック・ミレーヌ、映画監督のジャン・パンルヴェなど多数のアーティストについて、カタログや書籍に寄稿。米国のペニー・マッコール財団が主催するオードウェイ賞（批評・キュレーション部門）の初代受賞者（2005年）。

島袋 道浩

Shimabuku

[美術家]



1990年代初頭より世界中を旅しながら、そこに生きる人々の生活や新しいコミュニケーションのあり方に関するパフォーマンスやインスタレーション作品などを制作している。詩情とユーモアに溢れつつメタフォリカルに人々を触発するような作風は世界的な評価を得ている。近年はモナコ国立新美術館やクストハーレ・ベルンなどで個展が開催される。ヴェネツィア・ビエンナーレ（2003、2017年）、サンパウロ・ビエンナーレ（2006年）、あいちトリエンナーレ2010、ハバナ・ビエンナーレ（2015年）、リヨン・ビエンナーレ（2017年）などに参加。Reborn Art Festival 2019（宮城）ではキュレーターも務める。

チーフ・キュレーター（学芸統括）

飯田 志保子

Iida Shihoko

[キュレーター]



photo: ToLoLo studio

東京都生まれ。名古屋市在住。1998年の開館準備期から11年間東京オペラシティアートギャラリーに勤務。2009年から2011年までブリスベンのクイーンズランド州立美術館／現代美術館内の研究機関に客員キュレーターとして在籍。韓国国立現代美術2011年度インターナショナル・フェローシップ・リサーチャー。アジア地域の現代美術、共同企画、芸術文化制度と社会の関係に関心を持ち、ソウル、豪州、ニューデリー、ジャカルタ各地域で共同企画を実践。第15回アジアン・アート・ビエンナーレ・バングラデシュ2012、あいちトリエンナーレ2013、札幌国際芸術祭2014キュレーター、あいちトリエンナーレ2019チーフ・キュレーター（学芸統括）を務めた他、2014年から2018年まで東京藝術大学准教授。国際美術館会議（CIMAM）、国際ビエンナーレ協会（IBA）会員、美術評論家連盟（AICA Japan）2021年度常任委員長。

キュレーター（現代美術）

中村 史子

Nakamura Fumiko

[愛知県美術館主任学芸員]



愛知県生まれ。東海圏から関西圏を拠点に活動。専門は視覚文化、写真、コンテンポラリーアート。2007年より愛知県美術館に勤務。美術館で担当した主な展覧会に「放課後のほらっぱ」（2009年）、「魔術/美術」（2012年）、「これからの写真」（2014年）がある。また、美術館では若手作家を個展形式で紹介するシリーズ「APMoA Project, ARCH」（2012-2017年）を立ち上げた他、2010年からあいちトリエンナーレに主会場のスタッフとして携わり、美術館活動と芸術祭の連携に取り組んできた。2015年より日本と東南アジアのキュレーターが協働で調査、展覧会企画を行う美術プロジェクト「Condition Report」（国際交流基金主催）に参加し、2017年にはタイのチェンマイにてグループ展「Play in the Flow」を企画、実施する。

堤 拓也

[キュレーター/グラフィックデザイナー]

Tsutsumi Takuya



photo: Kai Maetani

滋賀県生まれ。大津市在住。2011年旧京都造形芸術大学卒業後、2013年から2016年まで同大学付属施設ARTZONEディレクター兼キュレーター。同年よりポズナン芸術大学（ポーランド）にて1年間のレジデンスを経て、2019年アダム・ミツケヴィチ大学大学院修了（カルチュラルスタディーズ専攻）。主なキュレーション実績に「類比の鏡/The Analogical Mirrors」（滋賀、2020年）、「ISDRSI 磯人麗水」（兵庫、2020年）など。展覧会という限定された空間の立ち上げや印刷物の発行を目的としつつも、アーティストとの関わり方を限定せず、自身の役割の変容も含めた有機的な実践を行っている。2018年より共同アトリエ「山中suplex」プログラムディレクター。

パフォーミングアーツ・アドバイザー

藤井 明子

[愛知県芸術劇場プロデューサー]

Fujii Akiko



1992年より愛知県文化情報センター学芸員（音楽）、2016年より愛知県芸術劇場シニアプロデューサー兼チーフマネージャー。野村誠『プールの音楽会』（2010年）、小杉 武久「MUSIC EXPANDED #1、#2」（2016年）、三輪真弘+前田真二郎モノローグ・オペラ『新しい時代』再演（2017年）ほか、現代音楽、民族音楽、ジャンルにとらわれないミュージシャンや作曲家に焦点を当てたコンサートや映像、ダンスとのコラボレーション公演の企画・制作を行う。あいちトリエンナーレ2010、2013、2016パフォーミングアーツ・プロデューサー、キュレーターを務めた。

前田 圭蔵

[アートプロデューサー]

Maeda Keizo



photo: Ryuji Miyamoto

多摩美術大学芸術学科卒。世田谷美術館学芸課に勤務後、株式会社カンパセーション&カンパニーで、音楽やパフォーミングアーツの企画制作や、レコード・レーベル運営等を手掛ける。また、2001年より、ウェブサイト・マガジン『realtokyo』の編集/運営に携わる。2005年に愛知県で開催された日本国際博覧会では、複数の国際プロジェクトを担当。フェスティバル/トーキョー2011制作アドバイザー、あいちトリエンナーレ2013パフォーミングアーツ部門プロデューサー、六本木アートナイト2014プログラムディレクターなどを歴任。また、2012年以降は、公益財団法人東京都歴史文化財団東京芸術劇場のスタッフとして、国内外のパフォーミングアーツの企画制作等に携わっている。

キュレーター（パフォーミングアーツ）

相馬 千秋

Soma Chiaki



photo: Yurika Kawano

[アートプロデューサー/NPO 法人芸術公社代表理事]

フェスティバル/トーキョー初代プログラム・ディレクター（2009-13年）、「急な坂スタジオ」初代ディレクター（2006-10年）等を経て、2014年にNPO 法人芸術公社を設立。国内外で舞台芸術、現代美術、社会関与型芸術を横断するプロデュースやキュレーションを多数行う。2015年フランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエ受章。立教大学特任准教授（2016-21）。あいちトリエンナーレ 2019 キュレーター。2017年より「シアター commons」実行委員長兼ディレクター。令和2年度（第71回）芸術選奨（芸術振興部門・新人賞）受賞。

キュレーター（ラーニング）

会田 大也

Aida Daiya



[山口情報芸術センター（YCAM）アーティスティック・ディレクター]

2003年開館当初より11年間、山口情報芸術センター（YCAM）の教育普及担当として、メディアリテラシー教育と美術教育の領域にまたがるオリジナルワークショップや教育コンテンツの開発と実施を担当する。2014年より東京大学大学院ソーシャルICTグローバル・クリエイティブ・リーダー[GCL]育成プログラム特任助教。あいちトリエンナーレ 2019 ラーニング・キュレーターを経て、2021年現在、YCAM 学芸普及課長を務める。

山本 高之

Yamamoto Takayuki



photo: Kato Hajime

[アーティスト/スクール・イン・プログレス・コディレクター/
オンゴーイング・スクール・ディレクター]

愛知県生まれ。子どもの会話や遊びに潜在する創造的な感性を通じて、普段は意識することのない制度や慣習の特殊性や個人と社会の関係性を描き出してきた。近年は地域コミュニティと協働して実施するプロジェクトや、一般を対象としたオルタナティブなアートスクール・プログラムにも取り組んでいる。これまでに第6回シャルジャ・ピエンナーレ（シャルジャ・アートセンター、2003年）、「笑い展：現代アートに見る『おかしみ』の事情」（森美術館、2007年）、あいちトリエンナーレ 2010（旧石田ビル、2010年）、「アジアの亡霊」（アジア美術館、サンフランシスコ、2012年）、「ゴー・ビトゥーンズ展：こどもを通して見る世界」（森美術館ほか、2014-2015年）、第3回コチ＝ムジリス・ピエンナーレ（アスピン・ウォール、2016年）などに参加。2017年にはアートラゴあいちにて個展「山本高之 Children of men」を開催。

議案 2 2021 年度事業計画及び収支予算について

(2021 年 4 月 1 日から 2022 年 3 月 31 日まで)

1 2021 年度事業計画

国際芸術祭「あいち 2022」の開催に向け、現代美術、パフォーマンスアート、ラーニング、芸術団体との連携事業など、各事業の準備を進めるとともに、芸術祭への期待や開催気運を高めるため、広報・PR 等を実施する。また、新型コロナウイルス感染症対策調査や、若手芸術家を対象とした公募による現代美術の企画展示「アーツチャレンジ」を実施する。

(1) 企画準備

○ 現代美術

出品作家の選定、会場の選定、展示計画の作成、招聘作家の受入、作品制作の準備等

○ パフォーマンスアート

公演内容の決定、公演会場の調整等

○ ラーニング

プログラム内容の決定・実施等

○ ボランティア運営

会場運営や作品解説を行うボランティアの募集及び研修会等の実施

○ 新型コロナウイルス感染症対策調査

県内外の芸術祭等における感染症対策を調査し、本芸術祭における必要な取組を検討するとともに、その影響を分析し、運営体制や収支計画の検討を実施

(2) 広報・PR

Web サイトや SNS を活用した情報発信、ポスター・チラシ・広報グッズの作成・配布、記者会見・PR イベントの開催、各種広告の出稿 等

(3) 連携事業・アーツチャレンジ

○ 連携事業

地元文化芸術団体等との連携事業の検討及び調整、地元芸術大学との連携による「アトラボあいち」での企画展の開催等

○ アーツチャレンジ

若手芸術家を対象として主に現代美術作品の企画募集を行い、選考の上、展示・発表の場を提供(開催時期：2022 年 2 月頃、会場：愛知芸術文化センター)

(4) その他

組織委員会運営会議等の開催等

2 2021 年度収支予算

(1) 収入の部

(単位：千円)

科目	予算額	摘要
1 負担金収入	1 2 5, 7 5 4	愛知県負担金
2 諸収入	1	受取利息収入
収入の部 合計	1 2 5, 7 5 5	

(2) 支出の部

(単位：千円)

科目	予算額	摘要
1 事業費	1 2 3, 7 0 3	
(1) 企画準備	7 2, 3 9 9	(現代美術) 会長・芸術監督・キュレーター費、アーティスト招聘旅費、作品制作費等 (パフォーマンスアート) キュレーター費、アーティスト・団体招聘旅費、舞台設計・作品制作費等 (ラーニング) キュレーター費、資料作成費等 (ボランティア運営) 運営委託費 (新型コロナウイルス感染症対策調査) 調査委託費
(2) 広報・PR	3 0, 5 7 8	Web サイト管理運営費、広報業務委託費、PR グッズ・チラシ・ポスター等制作費、記者会見・PR イベント開催費、広告出稿費等
(3) 連携事業・アーツチャレンジ	2 0, 7 2 6	(アトラボあいち) 運営費等 (アーツチャレンジ) 作家選考費、会場運営費、Web サイト管理運営費、作家活動奨励金等
2 管理費	2, 0 5 2	運営会議開催費、事務機器リース費等
支出の部 合計	1 2 5, 7 5 5	